

火野葦平「羅生門」論

—芥川龍之介「羅生門」の受容と改変—

陳 徳超*・吉村 誠

A Comparative Study of Hino Ashihei's Rashōmon and Akutagawa Ryūnosuke's
Rashōmon

CHEN Dechao*, YOSHIMURA Makoto

(Received September 28, 2018)

要旨

火野葦平の「羅生門」（1946年、『九州文学』）は芥川龍之介の同名作を河童ものに改作したものである。戦争文学作家として世に知られている葦平は河童の愛好家でもあり、河童ものと言われる作品を数多く残している。芥川の「羅生門」を元に改変した「羅生門」はその中の一つである。

本論では、葦平「羅生門」の成立を明らかにした上で、この二作の「羅生門」を比較しながら、葦平が芥川の「羅生門」に対してどのような受け止め方を持っており、その上で原作をどのように自分の作品の中に持ち込んでいるのか。葦平の「羅生門」に原作には見られない独創性がどこにあるのか。その独創を通じて表している主題と葦平自身の「戦後」とはどのような関わりを持っているのか。このような問題を究明するために、葦平が敗戦前後の混乱期を背景に、嘘をつくまいと考えて、身体をぶつけるようにして記している小説「革命前後」（1960年、中央公論社）を視野に入れながら考察していく。

1. はじめに

火野葦平の「羅生門」は一匹の河童が主人公となっている。葦平の河童に対する愛着は半端ではない。自身、戦後の1958年6月に『火野葦平選集第三巻』の解説で次のように語っている。

私が河童に執心したことは、長く、且つ、深かったようである。私の胎内に、いつ河童が棲息するようになったか知らないが、今や河童は私の宿命となって、私にこびりついている。¹⁾

河童の愛好家で、若松の自宅を「河伯洞」と称した葦平は、河童を登場させる作品を数多く書いたことでも知られており、河童ものの短編の集大成『河童曼陀羅』（1957年、四季社）を残しているほどである。そこには合計44篇の河童小説や河童音頭が収録されている。彼に描かれている河童は、鈍重で暗愚ではあるが真摯で信義を重んじ、時には没落した平家一族の怨霊の化身²⁾として登場し、時には愚かな発想で傷付いたり仲間たちに嘲笑され馬鹿にされたり³⁾している。井口時男は葦平の河童たちには、「どれも、弱者、敗者の哀れと滑稽がにじんでいる」⁴⁾と言っているが、その通りであろう。

さて、葦平の河童ものをめぐり、まず、四季社版『河童曼陀羅』に寄せられた佐藤春夫の「河童曼陀羅叙」の一節を取りあげたい。氏は芥川龍之介と葦平の描いた河童の相違をトータルに論じ、葦平の河童ものに好感を持つ理由を次のように述べている。

芥川龍之介のカッパはその知性によって成る人間生活の諷刺であったが、火野の河童はひとり知性のみの産物ではなく、その情意を傾けて成る。その人の相違は自ら文の差となって現れ、火野の河童の生態が芥川が白眼を以て見たるものと異なるは言を俟たぬ当然であるが、僕が芥川の白眼に見たるカッパを喜ばず寧ろ火野が青眼を以て河童を見るを愛好するのは、僕が火野とともに南国の田舎者として、その性情の芥川に遠く火野に近いものがあるためか。⁵⁾

また、増田周子は水木しげる「河童の手」とその原作

* 山口大学大学院東アジア研究科

にあたる葦平「手」を取りあげ、二作の違いを比較しながら、両者の文学の特徴やそのまとめ方の違いがどのように生まれたのかを検証している⁶⁾。増田によると、両作で最も違うところは、葦平の「手」の河童は、水木の「河童の手」に登場する凡太坊という河童と比べると少しロマンチックではあるが、凡太坊ほど明るくなく、悲観的である。増田はそのように論じ、更にそのような違いは両者の生き方の違いからくるものだと指摘し、葦平の描いた、狆の武士に騙され、蔑まされ、振り回されて人間不信に陥った河童は、戦後における葦平自身の悲惨な姿が重ねあわされているとする。

以上、葦平が描いた河童に対する佐藤の批評や増田の論考を見てきた。葦平の河童ものは、「麦と兵隊」（1938年、『改造』）をはじめとする日中戦争中の兵隊ものや、「花と龍」（1952-1953年、『読売新聞』）に代表されるような戦後の任侠ものなどと並行し、葦平の文学テーマの多様性を物語っている。けれども、筆者の管見の限り、如上の増田の論を含めてこのような作品群を具体的かつ本格的に論じ、その位置づけを明示した先行研究は必ずしも多いとは言えないのが目下の状況である。このような現状を踏まえながら本稿では、葦平の40作あまりの河童短編作品から「羅生門」の一作を取りあげて考察してみたい。まず、葦平「羅生門」の成立を明らかにしておこう。

2. 葦平「羅生門」の成立

芥川の「羅生門」⁷⁾は1915年11月号の「帝国文学」に柳川龍之介のペンネームで発表され、現在では内容の紹介も不要なほど芥川の名作中の名作である。その題材が『今昔物語集』からとられ、さらに『方丈記』など多くの関連先行作品が援用されていることもよく知られている⁸⁾。

一方、芥川の「羅生門」を主たる原典にして構想された葦平の「羅生門」は、敗戦後の1946年8月発行の『九州文学』に発表されたものである。これより必要に応じてその内容に触れていくことになるが、ごく簡単に梗概を記しておく。

旱魃や飢饉などの災いが起こったため、故郷の姥口の沼と食とを同時に奪われた一匹の河童が、突然降った雨で羅生門の下で雨やみを待っていた。断るまでもなく、雨に濡れては困るために雨やみを待っていたのではない。一刻も早く故郷に帰りたいがっている河童は、姥口の沼に少しでも多くの水がたまるのを待っていたのである。

夕方時分、雨がやんだ。河童は沼の水量を期待しつつ、長く住みついた羅生門を出て帰路につく。けれども、沼に着くやいなや、河童は意外なショックを受ける。羅生

門に引き取り手のない死人が捨てられていたように、沼も死者の屍骸で埋め尽くされ、そこに住むことはもはやできなくなるのである。仕方なく、河童は第二の故郷と心に定めた羅生門への道を引き返す。

帰ってみると、どうも羅生門の様子が出た時と違っていると河童は気づき、楼上に登る。そこで見たのは死骸から長い髪を抜いている一人の老婆。そして突然、一人の下人が楼上に飛び上がり、老婆の前に立ちはだかる。生きるためにそうせざるを得ないという老婆の論理を聞き、下人は窮しているのは同じだ、と老婆の着物を剥ぎ取って逃げる。その一部始終を見ている河童は、とうとう羅生門には二度と来ないと決心し黒洞々たる夜の中へ消えていく。

以上は葦平「羅生門」の粗筋である。芥川の「羅生門」に見る下人が老婆の着物を奪い取り去っていく内容を、葦平がそのまま自作に持ち込んでいるようなところもあるし、河童が故郷の姥口の沼に帰る話など、葦平が作家としての創造性を駆使し作り上げている部分も読み取れよう。

ところで、葦平が芥川作品を愛読したのは、筆者の知る限り、早くも1923年に彼の自筆日記から窺える。例えば、「一月一七日」に葦平は次のように書いている。

今の文壇で一番自分を惹きつける作家は二、三しか居ない。(…)曰く芥川、曰く菊池、曰く谷崎、曰く久米、位にすぎぬ。他の作家は優れてはいるかもしれぬが、一向自分の心を惹かぬ。⁹⁾

更に、1928年7月24日、幹部候補生として福岡の歩兵第24連隊第7中隊に入営中の葦平は、その日が一年前、芥川が自殺した一周忌であることを知り、大きな打撃を受ける。1958年10月に発表された「青春の岐路」で、葦平はその心境を次のように記している。

漠然と、文学とマルキシズムの間を振り子のように揺れ動いていた昌介（葦平の化身、引用者注）にとって、この作家の自決は大きなショックを与えた。念願の早稲田大学に入り、文学一途に突き進んではいたが、昌介も自分の才能を反省して悲しくなる時があった。(…)自分に作家として立つ才能があるのかという疑問と設問ほど、深刻な問題はなかった。その時、芸術的才能に恵まれ、天才とまで称せられた芥川龍之介が自殺したことは、昌介を激しく打ちのめした。¹⁰⁾

作家としての才能が自分にはあるか否か、常に不安を感じつつある葦平は、芥川の自決で激しく打ちのめされ

ている。その結果、同年12月、早稲田大学在籍中の葦平は、父金五郎が同大学に出していた退学届を機に大学を中退し、労働運動に専念しようと決意する。以後1936年6月、文学復帰の第一作ともいべき「帝釈峡記」を発表するまで、葦平は沖仲仕として洞海湾で暮らしている。

1937年7月7日、盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が勃発する。葦平は間もなく徴兵され、同年11月5日に一兵士として初めて中国大陸に第一歩を踏み出す。翌年3月、葦平の小説「糞尿譚」が第6回芥川賞に決定した後、葦平は上海の支那派遣軍報道部へ転属する。その後、「兵隊三部作」に代表されるような兵隊ものを上梓したことで一躍国民的作家としてもはやされる。

しかしながら、1945年8月15日、日本が敗戦を迎えると同時に、戦時下での文筆活動により一転して戦争協力者として批判される葦平。戦犯作家として公職追放にされるか、自分の現在の境遇に怯える中で、1946年8月に本稿のテーマでもある「羅生門」を発表したのである。なお、結局志賀直哉¹¹⁾の必死の嘆願にも関わらず、1948年5月、葦平は連合軍による文筆家の追放指定を、尾崎士郎、林房雄らと共に受ける。その追放は1950年10月まで続いている。

3. 葦平「羅生門」と芥川「羅生門」比較研究

3-1 葦平の河童像

葦平の「羅生門」は、一匹の河童の「雨宿り」から始まる。

或る日の暮れがたのことである。一匹の河童が羅生門の下で雨やみを待っていた。(26頁)

冒頭では、葦平は芥川の主人公下人を河童に変えている以外に、原作をほぼそのまま自作にコピーしている。例えば、洛中の災害、衰微から仏像や仏具の破壊、更に王朝と貴族の政治的、宗教的な権威の象徴であった羅生門の放置、荒廃などで両作品はまったく同じである。見ようによっては、同じ作家としては他人のものをそのまま自作に引っ張ってくるというのはあるまじき行為だと思われるかもしれない。ところで、その後の二作を照らし合わせ読んでみると、まず何よりも注目したいのは、葦平が描出している、早魃や飢饉などの災いにより身体的に苦しんでいる河童像である。以下では、この点について論じてみる。

さて、芥川の「羅生門」では、下人が羅生門に辿り着いた経緯について次のように語られている。この2、3年、地震、辻風、火事、飢饉などのような災いが続いて起こっているため、京都の町は一通りならず衰微してい

る。この衰微の小さな余波の影響で、下人は4、5日前に長年仕えていた主家から暇を出され、行き所がなく羅生門の下に辿り着いたのである。盗人になるほかに生きる道がないという生の限界状況にある下人は、手段を選んでいるではないと認識していながら、なお盗人になる勇気が欠如している。その勇気の欠如と表裏であるかのように、従来から多く指摘されている通り、4、5日前から暇を出されているにもかかわらず、芥川がここで描いている下人像には、己の生命の危機に対峙する者としての緊迫感が欠けている。

例えば、平岡敏夫「羅生門」の、「餓死を前にして盗人になる勇気が持てぬこの下人は、にきびを気にしながらぼんやりしているのだが、それは、ゆとりがあると言ってもよいので、四、五日前に暇を出され、餓死を前にしているにしては、飢えの感覚がまったく描かれていない¹²⁾」との指摘がある。要するに、門下の下人は死への切迫感を持ち得ていない以上、盗人になるような決断の必要性も存在しない、ということであろう。

一方、葦平は芥川とは違い、最初から災いで苦しみを受けている河童像を描き続けている。まず早魃に伴い次第に身体の衰えが進んでいく河童の姿が浮き彫りにされている。日照りで姥口の沼が干上がったので、仕方なくいつも沼から見慣れた羅生門へだいたい以前から移住してきた河童は、自らの故郷を失ったばかりでなく、早魃になって以来、頭上の皿に水気を絶やさぬように一方ならぬ苦勞をしている。

方々からわづかの水を集めてきて皿に入れ、辛うじて健康を保っていたが、どこにも水が切れてくると、唾を塗ることでごまかしたり、はては尿をつけたりして保全を計った。もとより応急の姑息手段であるために、栄養不良と相俟って、次第に体力が衰えた。甲羅や蝶番や水かきの潤いもなくなると、身体中にリュウマチスのような痛みを覚え、歩行すらも困難になり勝ちであった。(27-28頁)

だからこそ、最初にぼつりと雨の一滴が落ちた時、河童はあまりの喜びに思わず頓狂な高い声を出す。けれども、頭上の皿に冷たい雨水が注いでいるうちに、元気を取り戻した河童は、これまで忘れていた空腹感を感じ始める。

早魃と共に、飢饉や疫病なども相次いで発生しているために、河童は好物の胡瓜どころか、唐黍や茄子でさえ容易に手に入れることができなくなる。災いで死んだ人間の尻子玉はかえって得る機会が多くなるが、それらのほとんどが腐敗し糜爛しており、たまに若干新鮮なものを見つけても滋養分に乏しく、空いている腹の足しには

ならない。食が足りないため栄養失調となった河童は、羅生門の下で雨やみを待っている時、猛然たる食欲に襲われ、腹がぐうぐうと鳴り、眼前に胡瓜や魚などの幻影が蜃気楼のように浮かんできて消えない。

その後、飢えに伴い歩くたびに空き腹に応える河童は、それでも故郷の沼に水がどれほどたまっているかを期待しながら帰路につく。ところが、思いも寄らぬ大量の屍骸の出現で沼が埋まっている。故郷がなくなり、仕方なく羅生門へ引き返す河童は、またしても楼上で老婆と下人との活劇に仰天する。結局、暗愚鈍重の河童は飢死しかかっているにもかかわらず、老婆や下人のように自分の生のために何をしてもよいような決断がつかないまま消えていく。

3-2 姥口の沼

前節にも述べたように、芥川の「羅生門」で下人の解雇は、災難がもたらす洛中の一通りならぬ衰微に起因しているが、この衰微が「一通りならぬ」であるがゆえにかえって、都内外の多くの人間に及んでいるはずである。要するに、下人や楼上の老婆のような生活に苦しんでいる人間が大量にいるのがむしろ作品内の世界にとって自然であろう。けれども、芥川はそのように描いていない。羅生門に登場する下人も老婆もあくまで一人だけで済まされている。

言うまでもなく、このような一見ご都合主義的な設定は作品の重要なポイントではない。周知のように、「平安朝シリーズ」と呼ばれる芥川初期の一連の歴史小説は「歴史離れ」の手法で書かれており、歴史の再現を目的としたものではない。下人の内面に描写の重心が置かれているこの「羅生門」は、舞台装置だけは過去のある時代らしくしてあるが、そこで動くのはあくまでも現代人と同じようなエゴイスティックな心情を持つ人物から成り立っている。

芥川から強い影響を受けている葦平の「羅生門」も、作者の生きた戦後の根底的ありように触れるものである。第4部分でも詳しく論ずるが、下人や老婆のような登場人物を批判的に照らし出す主人公河童の視線に、作者葦平の視線がそのまま重なり合っている。けれども、この作品の中に出てくる人間が、ただ羅生門の楼上で死人の髪の毛を抜いている老婆、及び老婆の前に突然現れている下人だけではない。河童の帰郷に伴い、物語の舞台は一旦羅生門から離れる。これから論ずるように、葦平は河童の視線を通して見る姥口の沼の惨状を加えていることにより、災いが来す洛中の衰微をよりリアリスティックに表現している。

河童は、夕方雨が止んだ頃に羅生門の下を出る。さほど遠くはないので、間もなく姥口の沼に久しぶりに帰っ

た河童は、しかしながら、故郷の思いがけぬ荒廃ぶりに呆然となって立ち竦む。羅生門の楼上と同じように、姥口の沼も洛中の死人で埋まっているのである。重なり合って堆積している屍骸は、沼を埋め尽くしているばかりではなく、盛り上がり岸の土堤にさえ溢れている。男や女、老人や子供のさまざまな屍骸は、悉く飢餓のためにがりがりに痩せている。その中の多くはすでに腐って鼻孔を激しく突き刺すような臭気を放っており、蛆が湧いてむちむちと不気味な音を立てている。

期待に反して落胆のために涙すらも出ない河童は、魂を奪われたように沼の縁にいつまでも立ち尽くす。すると、すでに暗黒となった夜の沼の状景の中に、何やら頻りに蠢いている人影らしいものがうつろな河童の瞳に映る。その人影は、死人の間をかき分けるように右往左往したり、或いは立ち止まって何かを探そうにきょろきょろしている。時に体を屈して蹲ると、死体の間に深く顔を突っ込むこともある。気が付くと、それは一人ではなく、同様の動作をしている者が河童の左右や足元に点々という。

その時、河童は故郷を失った悲しみに打ちひしがれているので、人間の動きには格別深く注意していないが、羅生門の楼上で見た老婆の不思議な挙動から、河童はその人影の異様な行動が一体何を意味しているかはじめてわかる。その中には、老婆のように死人の髪の毛を抜いている者もいれば、その懐を探したり、着物を脱がせたり、帯を解いたりしている者もいるようだと言いつく。

如上のように、芥川の「羅生門」には見られない姥口の沼の場面を述べた。正に「人間地獄」と言うしかないが、ここに出現した「地獄図絵」が色濃く描かれていることから、葦平は作品世界における災いの現実性を芥川以上に心がけていると思われよう。

3-3 河童の行方

下人の「雨宿り」から始まる芥川の「羅生門」は、最後に「下人の行方は、誰も知らない」との一節を以て終わってしまう。従来、この結びの一文に対し、様々な解釈が試みられている。例えば、1990年頃まで「羅生門」は、下人の心理の流れを中心線として持っており、羅生門の下で逡巡していた下人が、楼上で老婆の生の論理に触発されてエゴイズム許容の論理を獲得する、下人の自己変革の相に主題を求めているとする解釈が中心をなしている。その主題と相俟って、末尾の下人の「その後」が、「下人は盗賊となって洛中へ向かった」と理解されることが圧倒的に多いようである¹³⁾。

けれども、90年代に入った頃から、その作品に対する新たな読みが生まれることにより、下人は盗賊として

生きるのか、それともテキスト通り解釈の余地を残したまま物語を閉じるのか、決着を見ないままである。その中には堀部功夫のように、「羅生門」は対人恐怖症の治癒物語であり、対人恐怖のノイローゼに罹っている下人は、楼上で老婆の「贈与・互酬の原理」に触発されて社会人に変貌する¹⁴⁾と、極めて独特な見解を持っている論者もいる。

このように、これまで下人の「自己覚醒」や「自己解放」などを主題とする数多くの論考が無視できないとは言いながら、今となっては、下人の行方を寧ろ一つの読みに限定することができない。初出や初版の本文では、下人の行方が明確に示されているが、決定稿である『鼻』収録形では、下人の行方が明確にされない末尾の一文から、「羅生門」は開放的で多様な解釈を促す作品であると言える。つまり、この作品は、最後に下人の行方が明示されないことによって却って、読者の想像力を喚起する構造を持っているのである。

芥川の結び方と同様、葦平の「羅生門」も「河童の行方は、たれも知らない」を以て閉幕する。となると、この河童の「その後」について、どのように解釈したらいいのか。葦平が河童の行方を通じて表そうとしている主題は如何なるものなのか。以下では、後半部の物語の展開を見ながら、これらの問題を検証してみよう。

沼の惨状により故郷を奪われた河童は、深い吐息をつき、やむなく羅生門への道を引き返す。羅生門を第二の故郷と心に定めて帰ってきた河童は、不意に楼上で誰かが火を灯しているのに気づく。奇妙なことだと思いながら、河童は足音を潜ませて梯子を登り、上の様子を窺う。そこで見たのが、屍骸の間に蹲り、死人から髪の毛を抜いている一人の見慣れない老婆である。その不思議な挙動を見ているうちに、河童は沼で人間が何をしていたかをはじめて悟り、驚きの思いに打たれる。突然、一人の下人が、もう一つ門の外側にある梯子を登ってか、楼上に飛び上がり、老婆の前に立ちほだかる。葦平の「羅生門」における下人の初登場である。

老婆は驚きのあまり、頓狂な声を発し、慌てて逃げようとするが、下人に逃げ道を塞がれる。「何をしていた。さあ、何をしていた。言え、言わぬと、これだぞよ」と、下人に詰問された老婆は、生きるためにそうせざるを得ないと弁解し始める。

わしのすることは悪いことかもしれぬ。したが、このほかに、わしのような老いばれに何ができよう。わしはもう永いこと、飯を食わぬ。これこの通り、手も、足も、胸も、骨と皮ばかりじゃ。このままならわしは飢えて死ぬほかはない。飢死せまいためなら、仕方がないのじゃ。わしにできることをして、生きねばなら

ぬ。そうじゃろうが。おぬしにもそれはわかろう。な、わかるじゃろう。(32頁)

芥川の原作で老婆の自己弁解には、生前蛇を干魚と誤魔化して太刀帯の陣へ売りにいった行商女の詐欺の話が出ているが、葦平は自作でそれを省いている。老婆のエゴの論理を聞いた下人は「きっと、そうか、それに違いあるまいな」と、芥川の下人と同類のセリフを老婆に発し、「では、おれが引剥をしようと恨むまいな、おれもそうしなければ飢死をする身体なのだ」と、不思議な勇氣と確信に満ちた声で言い、すばやく老婆の着物を剥ぎ取り外側の梯子を夜の底へ駆け降りる。

突然老婆の前に出ており、着物を奪い取ってスパッと消えていくこの下人の行動から、彼はこの後またどこかの老婆を奪いに行ったり、或いは人家に潜り込んで物を盗んだりするに違いなかろう。ここから葦平が芥川の「羅生門」に対する理解が窺える。つまり、葦平は芥川の「羅生門」を、エゴイズムを描いている作品として捉えているのである。現在の芥川研究のレベルから言えば、一種の「誤読」に過ぎない。

傍観者の視線を失わず、楼上で的一幕をこっそり見ている河童は、自分も飢えているが、それでも老婆や下人、また沼の人間たちのエゴイズムに共感を持たず、もう二度とこの羅生門に住まいと、やがてすごすごと門の下へ降りる。どのようにして飢えを凌いだらいいか、またどこに住んだらいいか、河童は思案が浮かばないまま悄然とした足取りで、黒洞々たる夜の中へ消えていく。

以上は葦平「羅生門」の後半部である。「河童の行方は、たれも知らない」と、葦平は最後に書いているが、作品世界全体として見るならば、河童の将来には寧ろ暗澹たるものしかないように思われる。何の工夫もしなかったらこの河童はそのまま餓死することは想像に難しくはないが、先走って言えば、河童の行方を作者の姿と重ねると、そこに後年葦平の自死が暗示されているのではないか。このように、葦平は飢死しそうな一匹の河童を主人公にすることで、河童の存在とは対照的にむき出しになっている人間の欲求を批判的に表しているのである。

4. 「羅生門」の主題に見る葦平の「戦後」

前出の『火野葦平選集第三巻』の解説で、葦平は自らの河童ものを詩と小説との間を彷徨した彼が、「ほっと溜め息をついたような場所」¹⁵⁾であって、彼の「精神を不安にしている或る憂愁を滲み出させたいと願っての無我夢中の耽溺であった」¹⁶⁾と位置付けている。この一節から、葦平の河童には、まさに彼自身の姿が投影されていると言ってもよからう。事実、「羅生門」の主人

公河童が、戦後葦平自身の悩みや人間観を担って登場する。例えば、作中で災いによって河童の故郷が地獄のように化しているが、それは敗戦直後に葦平が見る日本の町の焼野原や、食糧不足で四苦八苦している民衆の哀れな姿など、作者自らの体験から「借景」したものと思われる¹⁷⁾。彼は芥川の「羅生門」を河童ものに改作することにより、自分の周辺にいる、終戦後の日本の社会を構成している人物像を寓意的で風刺的に描いているのである。以下では、主に「革命前後」を引き合いに、「羅生門」の主題に見る葦平の「戦後」を見てみよう。

1945年7月、葦平は福岡市の西部軍報道部に白紙徴用され、そこで敗戦を迎える。敗戦当日の夜、葦平は宿舎「川島ホテル」の自室で自殺しようとするが、これから日本の行く末を生きて見届けようとの決意から思いとどまる。けれども、8月17日に西部軍報道部解散後、若松に帰省する汽車の中で葦平は帰還兵に対する国民の態度の冷やかさや、敗戦に伴う民衆の価値転換の素早さに閉口する。汽車の中で占領軍相手にさっそくキャバレーを経営しようと打ち明ける乗客の会話や、掌を返したように早速万国旗を作って占領軍の歓迎準備に勤んでいる故郷の駅員を苦々しく見つめる。戦時体制の代弁者ともいうべき葦平にとって、終戦直後の日本は法も秩序も常識も、かつてあったものが全てひっくりかえった時代であったと言えるであろう。

いわゆる国民の価値観が180度変わった風潮の中で、葦平に対する眼差しも変わってしまう。戦時中はベストセラーで英雄視される葦平は、敗戦後はいきなり「文化戦犯」呼ばわりされるようになる。『火野葦平選集第四巻』の解説に、葦平は「戦後の花形となった共産党の『アカハタ』は文化戦犯第一号に、私の名をかかげ、私の周囲は敵ばかりになった」¹⁸⁾と綴っている。戦争中にお国のために、天皇のために自分なりに一生懸命頑張ってきた葦平は、このように批判されてかなり煩悶し戸惑っているに違いない。それゆえ、人間は土壇場に来れば、一切の粉飾が剥され、仮面の下に思いがけぬ表情が発見されると、彼は感慨する。

もちろん、人間の頭を離れた歴史的事実は存在しない。従って、敗戦を迎えても戦時中の日本社会を動かすメカニズムをそのまま続けてほしいという葦平の価値観そのものが問われるべきかもしれないが、成田龍一は葦平が闘っていたのは「ふたつの戦場」¹⁹⁾だと指摘している。一つは、実際の戦場であり、もう一つは戦後の日本社会であった。また、増田周子は戦前は天皇を崇めていた国民が敗戦直後に一転して天皇批判を行ったり、軍人をやたらと差別したりする様相に、葦平は日和見主義として反抗し、抵抗し続けた²⁰⁾と述べている。確かに、それらの主張は、「羅生門」で河童の目線を通して見る人間

のエゴイズムを葦平は批判的に表していると前述の通りである。いざという時に老婆や下人のように利己的で争いを起こしてやまないと、人間本来の滑稽さ、醜さに葦平は反発しているように見える。因みにこの種の反発は、「羅生門」とほぼ同時期に発表された梅崎春生の「エゴイズムに就て」（1947年、初出未詳）における梅崎自身の「エゴイズム」思想²¹⁾、或いは「墮落論」（1946年、『新潮』）や「墮落論〔続墮落論〕」（1946年、『文学季刊』）などで、政治や戦略の上で美化された「人間でない」嘘っぱちの聖人から自然本来の人間に戻るように訴えた坂口安吾²²⁾とは全く異なっている。

だが、葦平が反発しているような人間の中には彼自身が含まれていないかと言えば、そうではあるまい。戦場での執筆活動が結果的に銃後や前線の好戦気分を煽ったにもかかわらず、葦平は公職追放仮指定に対する「異議申立書」で、「私は祖国の前に、貧しい私の力のありたけは捧げねばならぬと信じました。この私の愛国の情熱が誤謬であると言われれば、もはや何も申すことはないのであります」²³⁾と、自分の過ちをひたすら否認している。倫理性や道德観は自分の有罪性を土台にしない限り、世の中の闘いや紛争はいつまでたっても続くであろう。なぜならば、「私は他人以上に有罪である」という自覚を持っていなければ、自分と他者の自由が相剋的な立場で向き合っている時、先に矛を収めて友情と雅量を示すのが、相手ではなく「私」でなくてはならない理由が「私」の側にはないからである²⁴⁾。

最後に、1960年1月23日に、葦平は若松の自宅で、「死にます。芥川龍之介とはちがふかもしれないが、或る漠然とした不安のために。すみません。おゆるし下さい。さやうなら。昭和三十五年一月二十三日夜。十一時あしへい」²⁵⁾と、芥川と同じように「不安」の遺書を残しアドルム自殺を遂げる。まだ53歳という若さであった。葦平を自死するまでに追い詰めたのが一体如何なるものなのか。以上述べたことから多少のヒントが得られると思う。終戦の日を境目に日本のこれからへの期待の中で戦後へ出発しようとする葦平であるが、彼は予期せぬ国民の価値転換に遭遇する。そして、その価値転倒によって自身が厳しい批判に痛撃されると、葦平はその境遇を河童ものに託し、「滑稽動物」である人間のエゴイズムの前で孤立し、絶望の淵に陥っているという彼の内面を告白しようとしている。やはり自分に残された道は死ぬほかないと、葦平は「羅生門」を書いている時点で再認識したのではないか。その結果、1960年について自らの命を絶ったのである。

5. 結びに代えて

本稿では、芥川の「羅生門」をもとに創作した葦平の

「羅生門」を取りあげ、この作品に見る芥川の影響と葦平の独創、及びその主題と作者自らの「戦後」との関わりを検証した。作品のタイトルや冒頭部分などから、葦平が芥川に仮託していることはいままでのまでもない。しかしながら、飢えの感覚がまったく描かれていない芥川の下人像とは違い、戦後間もなくという時代的背景に深く根付いている葦平は、自作において終始災いで身体的に苦しみを受けている河童像を描き続けている。そして、河童の目を借りて見る姥口の沼の惨状を色濃く表現していることから、葦平は作品世界における災いの現実性を芥川以上に心がけていると言えよう。

また、主題としては、芥川は下人の心理の推移を中心に置き、人間の存在悪を肯定も否定もせず描いているようだが、葦平はそれとは別に、羅生門の楼上での下人と老婆との活劇などを通じて、河童の存在とは対照的にむき出しになっている人間の欲求を批判的に描いている。戦争中における国家意思の代弁者としての葦平は、敗戦という衝撃で戦時下の価値観が崩れ去っていく中でも、これまで育てられた旧来の考え方、思考の枠組みを打破できない。従って、「羅生門」を通じて、終戦後の日本の社会を構成している国民像を作中の下人や老婆といった人物に投影し、土壇場に來れば利己的で争いを起こしてやまないと、人間本来の在り方を苦々しく見つめているように見えるのである。

「羅生門」においてもそうであるが、葦平は戦後多くの作品やエッセイで「人間は滑稽動物である」と書き続ける。

流行、風潮、オポチュニズム、仮面をかぶったエゴイズムだけが人間と世界をうごかす最大の動力であるとすれば、昨日も信じられず、今日も信じられず、まして明日などをどうして信じられよう。滑稽動物である人間が右往左往している目まぐるしさによってのみ、人間がむきだしになっている。²⁶⁾

このように、流行などにばかり振り回されない生き方が必要だと、戦後葦平は自国の民衆に繰り返して訴えているが、1960年に短い遺書を残して書斎で自死する。その文面は、深く心を占めていた「戦争」にも「中国」にも及んでいなかった。

付記

・本稿における原文の引用は、すべて「羅生門―伝説」の一章『九州文学85(8)』(1946年、九州文学社)による。論中に本文を独立した段落として引用した場合、すべて引用頁を明記し、それ以外の場合、原則として頁数を省略している。

註

- 1) 火野葦平、1958年、『火野葦平選集第三巻』、創元社、462頁。
- 2) 火野葦平、2007年、「海御前」『糞尿譚・河童曼陀羅(抄)』、講談社、174-188頁。
- 3) 同書、105-114頁。
- 4) 同書、245頁。
- 5) 火野葦平、1957年、『河童曼陀羅』、四季社、5頁。
- 6) 増田周子、2015年、「火野葦平『手』と水木しげる『河童の手』」『関西大学文学論集64(4)』、関西大学文学会、1-38頁。
- 7) 芥川龍之介、1977年、『芥川龍之介全集第一巻』、岩波書店、127-136頁。
- 8) 例えば、志村有弘『芥川龍之介『羅生門』作品論集―近代文学作品論集成4』(2000年、クレス出版)に、「『羅生門』の表現方法―森鷗外『金貨』の影」や、「『羅生門』における『ツアラトゥストラ』受容」などのような論考を挙げている。
- 9) 増田周子、2010年、「火野葦平自筆日記翻刻(大正十二年)1」『関西大学文学論集59(4)』、関西大学文学会、27-28頁。
- 10) 火野葦平、1980年、「青春の岐路」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、147頁。
- 11) 山岸郁子、2010年、「火野葦平の公職追放仮指定に対する『異議申立書』と『証言』」『語文(136)』、日本大学国文学会、175頁。
- 12) 平岡敏夫、1982年、『芥川龍之介』、大修館書店、120頁。
- 13) 悉知由紀夫、2015年、「『羅生門』『下人の行方』と『下人の心』―『まだ燃えている火の光』をめぐって―」『国語論集12』、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室、143頁。
- 14) 前掲注8書、351-369頁。
- 15) 前掲注1書、463頁。
- 16) 同上。
- 17) 1945年6月19日に福岡が空襲された際、葦平はたまたま福岡市に來ており、この空襲を体験している。また、『革命前後』(1960年、中央公論社、171頁)に、「広島駅は異様な混雑をしていた。列車に乗る客だけではなく、停車場を宿にしている連中が多いらしく、一隅には釜やら鍋が置いてあって炊事が始まっていた。プラット・フォームの片隅にゴザを敷いて寝ている者もある。みんな哀れな風体の人たちばかりで、中には縋帯を巻いた怪我人、胡瓜のように青い顔をした病人も少なくなかった。(…)なんとも形容のしようのない臭気がたちこめている。それは腐臭のようでもあり、屍臭のようでもあ

る。」と、1945年8月末の広島駅の荒廃ぶりが描かれている。

- 18) 火野葦平、1959年、『火野葦平選集第四巻』、創元社、428頁。
- 19) 渡辺考『戦場で書く 火野葦平と従軍作家たち』（2015年、NHK出版、13頁）によれば、2014年8月、渡辺は日本女子大学の成田龍一氏に葦平のことを取材した際、氏から「ふたつの戦場」の話を得た。
- 20) 前掲注6書、35頁。
- 21) 例えば、梅崎春生は「エゴイズムに就て」（1985年、『梅崎春生全集第七巻』、沖積舎、82頁）において、「ルネッサンスが個人の自覚に始まったと言うなら、今の時代はエゴイズムの自覚と拡充から始まる。どの途現世の頹廢は底まで行き着かずにはおかぬ。生き抜く事が最高の美德であり、犠牲や献身が最大の欺瞞であることを僕等は否応なしに思い知るだろう。かくて僕等は僕等のエゴイズムと徹底的に抱き合わねばならぬだろう」といい、戦後の飢餓と混乱の中を生き抜く反倫理を表明しているのである。
- 22) 例えば、「墮落論」（2008年、『墮落論・日本文化私観』、岩波書店、229頁）の中で、「人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない」との一節がある。
- 23) 前掲注11書、172-173頁。
- 24) この発想は、エマニュエル・レヴィナスの哲学における「他者への有責性」というものによる。内田樹はレヴィナスによる「他者への有責性」の問題について、その著書『レヴィナスと愛の現象学』（2011年、文藝春秋、258-260頁）の中で次のような指摘をする。「相称性の上に倫理を構築することはむずかしい。というより原理的に不可能である。これはレヴィナスが『私と君』の相互性に基づいてその哲学を構想したマルチン・ブーバーを批判したときの中心的な論点であった。（…）相互性という考え方は、平たく言えば『私と君の立場は交換可能だ』ということである。（…）しかし、相互性の道徳からは、どうやっても、『私はあなたより多くの責務があり、あなたは私より多くの権利がある』という言葉は導出されない。しかし、レヴィナスが求めているのは、まさにその言葉なのである。（…）レヴィナスが繰り返し引く『カラマーゾフの兄弟』の一節。『私たちは全員がすべてについて、おたがいいに対して、罪を負っています。そして私は他の誰

よりも罪が深いのです』」。

- 25) 火野葦平、1972年、「遺書（ヘルス・メモ）」『文藝春秋50（4）』、文藝春秋、298頁。
- 26) 火野葦平、1954年、「滑稽憲法」『文学界8（4）』、文藝春秋新社、120頁。